325
269

予が實驗の宗教

始

FROM BUDDHISM TO CHRISTIANITY:
A PERSONAL EXPERIENCE
By Rev. K. Imai

今井革著

予が實驗の宗教

日本基督教興文協會

In this volume, Mr. Imai relates more fully than in his *Why I Left Buddhism and Became a Christian* the story of his religious career. He compares the prophecy of Buddha with the prophecies of Christ in a striking manner, relating on the one hand to the decline of Buddhism and on the other to the triumph of world-wide Christianity. He concludes with an account of Capt. Bickel's work with the Fukuin Maru, as a fitting illustration of the spirit of the gospel.

PRICE 15 SEN

328-269

帝國圖書館藏

予が實驗の宗教

大正
7. 1. 7
内交

基督教興文協會の事業は、日本の基督信徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッションの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

住職時代の著者

改宗當時の著者

芝日本基督教會長老飯田平吉氏寄贈

予が實驗の宗教

東京　今井　革

日本の佛教は將來どうなるであらうか、今日よりも盛になるであらうか、或は衰へるであらうか、また基督教はどうなるであらうか、增々盛になるであらうか、遂には日本帝國を教化するであらうか。

是等のことに就ては、心ある者が常に考へて居る問題である、色々の意見もあらうし、議論もあらうが、併し人間の臆說よりも、先づ釋迦か佛教に就て、何と預言せられてあるかを攻究することが、一番確實であらう、次に基督が其福音に對して、何と預言せられたかをも研究することが、最も必要であらう、そして健全なる宗教を選ぶと共に、それに依て堅實

なる信仰を養ふといふことが、志道者諸君のために、極めて大切なることと思はれる、それ故に先づ釋迦の預言に就て考へてみやう。

第一章　釋迦の預言

（一）

佛教の經典多しといへども、何の經文を讀でも其終りには、（皆大ニ歡喜シ信受奉行シテ作レ禮而去ル）といふ一定の文句が書てある、これは釋迦の說法を聽問した弟子等は、皆大に歡ひ喜んで信受奉行したといふのである、然るに之と正反對の文句の錄されてある經文が數種ある、その一は佛說法滅盡經といふ經文であるが、この經文の終りには、（聞レテ經ヲ悲慘惆悵シテ而去ル）と、錄されてある、なぜ斯う云ふ文句が錄されてあるかと云ふと、例

の如くに說法が始るといふので、弟子等は釋迦のもとに集つた、ところが（世尊寂靜無レ所說ク光明不レス現セ）とある如く、默つて御座つた、そこで弟子の阿難が、（何故ニ如レキ是ノ）かと訊ねられたすると釋迦は（吾涅槃ノ後……魔作テ沙門ト壞亂ニス吾道ヲ）惡魔が僧侶となつて佛道を破壞すると申された、何ういふ風に破壞するかといふに就て、十四ヶ條の理由を述べられた、それを聞たところの弟子等は胸うたれて、この尊い佛法が末世に於ける惡魔的僧侶のために滅亡するかと思ふた時に、悲み歎いて去つた故に、（悲慘惆悵而去）と錄されたわけである、今その十四ヶ條を一々こゝに說明する餘地はないが、其うちの數ヶ條を擧げてみやう。

▲著ニ俗ノ衣裳ヲ樂フテ好ンテ袈裟五色之服ヲ

元來袈裟とは梵語でカラサエの略語である、漢譯では不正色といふ、不正色とは青黃赤白黑以外の色をいふので、鼠色とか木蘭色とかの極め

て不立派な色、地質は木綿若くは麻の類で拵へたもの、五條袈裟七條袈裟九條袈裟、それから十一條十三條十五條十七條十九條廿一條廿三條廿五條までである、其人物と場合に依て被着する袈裟が違ふのである、袈裟の意味は福田といふことで、田に種をおろしてから米に仕上る迄には、色々と困難辛苦を經ねばならぬ如く、佛弟子たるもの袈裟(福田)を身にかけて衆生濟度のために働く以上は、種々様々なる辛苦を經ねばならぬといふ意味である、傳教大師は常に九條袈裟をかけて居られたと云ふことであるが、たま〳〵、桓武天皇から京都の市區改正に就て御意を承はつた時、身にかけて居る質素な九條袈裟を叡覽に供して、これを標準に市區改正を致されたといふことである、今日でも京都の町に三條通りとか、四條五條といふやうな名の殘つて居るのは、それが爲である、昔の名僧は質素な袈裟をかけながら、市區改正せられたが、今日の僧

侶は俗服を着るを喜び、俳優のやうな金襴緞子の赤や紫の袈裟をかけることを、樂ひ好んで着るやうになるといふことを、三千年の昔に預言なされたのである。

▲飲酒噉肉殺生貪味

飲酒戒は釋迦が說かれた戒法中の一である、然るに今日では大抵の僧侶は酒を呑む、甚敷は土瓶に酒を入れて般若湯と稱して煎茶茶腕で人にも飲ましむ、人參午蒡の如な精進ものは甘く無いといふので、牛肉で御座れ生魚で御座れ勝手放題である、たとへ(不許薰酒入山門)といふ碑文が門前に在たところで、(懷中物御用心)とある所に却てスリが潛んで居る如く(不許薰酒入山門)と制札のあるのは、却て薰酒山門に大入であるとの反證である、若し品行方正ならば此碑文の必要はなからう、斯る(惡魔作沙門壞亂吾道)とは、何とも恐入た預言である。

▲寺廟荒蕪シテ無シ復修理スルコト轉タ就シム毀壞ニ

住僧その人に道心ありや否は、一たび寺内に足を踏み入れて見れば直に分る、寺塔の營繕も行屆き、庭園の掃除も奇麗に出來て居る寺の和尚は大抵道心堅固である、堂宇が荒ても祖廟が壞れても、瓦が落ちやうが塀が倒れやうが一向お構ひなく、石塔の頭に襁褓が干してあるやうでは、兎手毛信者に信仰の起らう筈がない、信仰が起らなければ淨財の寄附をしない、寄附をしないから(寺廟荒蕪……轉タ就ニ毀壞ニ)と申されたので、誠に歎はしき次第である。

▲貪リ財物ヲ積聚シテ不散不作福德ヲ

世に宗教家ほど矛盾の甚敷ものはない、(妻子モ珍寶モ及ビ王位モ、臨ム命ノ終リニ時ハ不レ隨ハ者)と、人には教へながら、自らは財物を積聚するに齷齪として、或は年忌、追善、授戒、開帳、御會式、報恩講など色々美なる名稱を設けて、實

際は鼻下殿建立のために財物を聚む、娼婦は親のために身を售り、僧侶は口のために佛を賣り、法を售る、然して是だけ儲けましたと恥敷もなく之を喋々するに至る、布施なき經は讀まずとは青田の讀經はお斷りといふの意味、斯して積聚したる財物は何の爲に用ゐんとするか、果して護法扶宗の爲なるか、否な高利かし、遊蕩費、或は妻妾の生活費に充るに至ては、實に言語道斷沙汰の限りである、釋尊曰く、(實を結びし芭蕉は枯れ果て、駱駝兒を產んで其母死す、汝等佛弟子たるもの過分の信施を受る時は正法衰滅すべし)と、眞に恐るべき預言である。

▲婬佚濁亂男女ヲ不別ダ

今はむかし、女人禁制の伽藍に於て、いふも耻かしき男色は行はれしと云ふ、是を男女不別とはいふならん、七ッ過ては男子入るべからずといふ尼寺の御堂の下に、恐ろしや赤ん坊の死體を發見せしといふ、是を婬

妖濁亂の結果とやいふならん、然るに女人の禁制一たび解れて肉食妻帯勝手たるべしとなるや、忽ち隨喜の涙を流して之を歡迎し、今は寺内到る處に丸髷の女菩薩を見る、或は市井の間に妾宅を構へて、夜陰ひそかに此所に往來する色魔の和尚もあるといふことを聞く。

▲經不誦習設有讀者不識字句

幾千萬の經卷を悉く讀破することは到底不可能のことではあるが、せめては其宗派に於て所依とする經文丈でも誦習するやうにして欲しいものである、然るに實際は葬式とか追善供養とかの爲に、能く賣れる經文丈しか弟子に敎へない、弟子もまた賣れ口のない經文などは習はうと爲ない、從て習はぬ經は讀めないと平氣で濟して居る、たま〳〵口には讀經すれども、その經文の字句は如何なる意味のものか、どんな思想が含まれて居るものか、そんなことは一向不識して、木魚や拍子木で

囃したてゝペラ〳〵と讀んでゆく、讀んで居る和尚も分らなけりや、聽いて居る人々も分らないで有難がつて居る、世の中にこんな分らない滑稽な狂言は他にはあるまい。

以上釋迦の預言が今日、日本の佛者に一々該當せることを思ふときに、法滅盡の機が愈々迫りつゝあるを感ぜざるを得ない、如何となれば佛弟子の狀態滔々如此にして、いかで佛法を興隆することが出來やうか、

釋尊曰く、眼見沙門如視糞土、無有信心、と、佛法の滅亡は釋迦の預言であると共に掩ふべからざる事實である、斯いはゞ假令法滅盡經に何と預言さるゝとも、未だ〳〵法滅盡の時代で無いと否定する人々もあらう、然らば正像末の預言を何と解釋するであらうか。

（二）

釋尊入涅槃の時から五百年の間を解脫の時と云ひ、後の五百年間を禪

定の時と云ひて、この間を正法時、一千年と云ふのである。
次の五百年間を讀誦の時と云ひ、後の五百年間を造塔の時と云ひて、この間を像法時、一千年といふのである。
これより後を末法萬年の時代といふので、之を正像末の三載といふて居る、學者に依て多少の異說はあるとしても、末法に至て正法滅盡するとの預言であることは明白である、今日は即ち末法の時代で、佛法滅盡の時機に入て居るのである。
大集經の示すところによれば。

正法時代（初の五百年は得道堅固、次の五百年は多聞堅固）
像法時代（初の五百年は三昧堅固、次の五百年は塔寺堅固）
末法時代（初の五百年は鬪諍堅固、次の五百年は愚痴堅固）

正法と像法と末法の三時代を經て、佛敎の滅亡を預言せられてある、今

日は末法中の愚痴堅固の時代である、今この正像末の三載を印度、支那、日本に傳播せし佛敎史に徵して極簡短に考へてみやう。

▲正法時、一千年（印度）

釋迦一たび印度に現はれ、華嚴、阿含、方等、般若、法華等の大獅子吼となるや、當時最も盛んなりし婆羅門の徒、及び九十六種の哲學者が、續々來つて佛弟子となりしもの數千人であつたされど釋迦一たび涅槃の雲に隱るゝや、婆羅門敎再び勃興し來りて、佛敎は之がために大打擊をうけた、が幸に十大弟子、五百の羅漢、數萬の信徒等、堅く正法を護持して動かなかつた、尙ほ釋迦滅後、百年の後ち提婆設摩が識身足論を著し、三百年後に於ては迦旃延が發智論を著し、四百年後に於ては五百の阿羅漢たち大毘婆娑論を造りて、旗鼓堂々小乘の基礎を鞏固にした（以上を正法時、前五百年と假定す）。

六百年後に及んで馬鳴菩薩、大乘起信論を著し、七百年後に於て龍樹菩薩が、智論、中論を著はし、こゝに於て大乘の妙理いよ〳〵隆盛を極め、九百年の後には無着菩薩現はれて、瑜伽論と攝大乘論を著し、その實弟、世親菩薩これが論草を造り、且つ佛性論、淨土論、阿毘達摩倶舍論、已下千部の論章を著す、其燦んなること想ふべし（以上を正時法後の五百年と假定す）。以上、正法時、一千年間は、釋迦一代の教說を編成したる時代で所謂解脫時と禪定時の預言が適應した時代である。

▲像法時、前五百年（支那）

佛教が始めて支那に來りしは、佛滅後一千十六年にして、後漢の明帝永平十年である、明帝夢に金色の軍人を見て西方に佛陀ありと信じ、使者を送つて奉迎せしめんと、到る途中、摩騰竺法蘭の二人、白馬に佛像經典を載せて來るに會ふ、これ佛教東漸の濫觴である、摩騰竺法蘭が所持の

梵經を譯出してより凡そ三百年の間は、專ら小乘の教經傳譯の時代であつた、その後、道安、慧遠を經て羅什三藏出るに及んで大乘始めて興り、眞諦三藏出でゝ大乘起信論を傳譯し、遠く印度より達磨來つて教外別傳不立文字の教旗を飜へし、次いで華嚴、天台の法鼓、隋唐の間に盛んに行はれ、更に唐の始め玄奘三藏、印度に研學すること十七年、歸り來つて新譯の經論併に大般若經六百卷の飜譯を出す、尙ほ唐代に於て眞言密教、振ひ興るなど（これ所謂像法時中、讀誦の時代である）併し支那の佛教斯く盛んなるが如くなれども、元來儒教主義の國體なれば、帝王の信仰せる時代にあつては旺盛を極めしも、不信なる帝王時代にあつては、佛教は異端なり邪教なりとして官民の攻擊をうけ、僧侶も屢々社會の迫害をうけた、降つて唐より以來僅かに臨濟、曹溪の外、二三の傑物出しのみにて、今日の滿清に至ては支那に佛教ありといはゞ、人々怪訝の感を懷

くまでに滅亡を極めた（以上像法時前五百年と假定す）。

▲像法時、後の五百年―末法（日本）

始めて日本に佛教の入りしは繼體天皇の御宇、司馬達等が齎らし來つたものであるが、これは達等個人の傳來であつて、國朝の傳來は欽明天皇の十三年、即ち釋迦滅後一千五百一年である（多少學者の異說はあるが）所謂像法時中の讀誦時代の終から、造塔時代の初め頃であつたと假定して大差なからうと思ふ、その佛教は一般民衆に傳へられずして、直ちに皇室に傳へられた、然も奉佛の動機は經典研究の結果にあらで、佛像の威德に信賴して或物を需められた、即ち三論を講じて雨請をするとか、維摩經を讀んで病氣平癒を禱るとか、仁王經を讀誦して豐稔をもとめる、といふやうなところから初まつて居る、降つて聖武天皇の聖代に至つて、盧舍那佛の鑄造となり、東大寺の建立となり、西大寺、七大寺の

創立となり、剩さへ國毎に國分寺を建つる等、實に造寺的盛況を極めたる造塔の時代である、其他、比叡山、平安城、高野山等、いづれも輪奐宏壯たる殿堂伽藍の建立は、當時民衆の信仰心に倚らずして、專ぱら王侯貴族に依て設立せられたものである、故に當時の佛教は日本の佛教にあらずして王侯貴族の佛教である、かくて像法の末期より、末法の初期に及んで、造塔建寺最も夥だしく、遂には王子皇孫を拜請して、天台座主と仰ぎ門跡と稱して、各々權威を弄するのみか、南都、北嶺、根來の僧侶は屢々鋒劍を振つて兵馬の間に現はれ、數百年間天下を擾亂せしめたる事實は、大集經に預言せられたる末法時、鬪諍堅固の時代に該當するものである。

斯の如く皇室の豐かなる保護の下に繁榮を極めし佛教も、政權一度び武門に歸するに及んで、南都、北嶺の大伽藍も其維持に困憊し將に頽廢

ぜんとする時、世は武斷一方の戰國時代となりしため、文學的方面は全く僧侶の專有物となりしかば、朝廷への奏狀を始めとして文書の往復等に至るまで、何かと多大の便益を得しより、武將等は僧侶を尊敬するがゆえに頽廢せる堂塔伽藍の經營は、多く彼等に依て維持せられた譯である。

降て織田信長が、破佛政策のために、天下の人心を失ひし前例に鑑み、德川政府は耶蘇教は國家に有害なりとの口實の下に、僧侶をして人民の戶籍に關する行政上の一部を擔當せしめ、之に報ゆるに各宗の存立を許し、寺錄を下して保護を與へしかば、僧徒は始めて安堵の思をなし、却て遊惰放逸、倨傲尊大の輩となりて、德川三百年間、泰平の夢あたゝかに長夜の眠りを貪り來りしが、俄然明治維新の革命に會ひて、憐れ僧徒は羅針盤を失ひたる航海者の如く、茫然自失そのなす所を知らず、こゝ

に至つて醜態百出、眞に憫むべき狀態に陷つた。こはこれ佛教傳來の當初より布教傳道の結果、民心に深き感化を與へずして、一に王侯貴族の保護に倚賴したる結果であるとは云へ、また大集經に預言せられたる末法時、愚痴堅固の時代に該當せるものである。

以上釋迦の預言なる正像末の三載に就て、之を印度、支那、日本の佛教傳播の跡に徵して考へて見ても、其滅亡の預言が一々適中して誤りなきことは眞に驚くばかりである。

斯く云はゞ他力教徒は云ふであらう、成程自力聖道門は滅亡するであらうが、他力淨土門は然らずと反駁するならん。勿論(末法萬年餘經悉滅、彌陀一教利物偏增)で、末法に至るも彌陀教のみは存在するとの經說あることは、拙者固より之を知れり。併し經文に何とあるにしても、佛者の實際生活が滅亡的預言に適應せるを如何せん、いくら最負目に見ても

之が滅亡の時代で無いと斷言することが出來やうか、何故なれば大體に於て。

(三)

▲敬虔の念が缺如して居る　遺族の哀で居る葬式や、年忌供養の席上で酒を飲んだり、一杯の微醉機嫌で說敎をするなどは、彼等にとつては慙愧の所業とも思はれず、寧ろ當然のことと思はれて居る、いくら學問があつても、善行をしても宗敎家がソンナ不敬虔なことでは俗の俗たるもの、從て人格も品性もあつたものではない。

▲家庭に淸潔が無い　眞宗の僧徒を除いて、公然と結婚式を擧た者は殆んどなからう、多くは密通不義の結果、寺院に同棲して居るものである、苦々敷は眞宗餘宗を問はず蓄妾せる和尙もある、如斯家庭に敎養せらるゝ弟子や子女は如何なる感化をうくるであらうかは略ぼ想像す

ることが出來る、飮酒、放蕩、虛言、僞瞞の行はるゝのは、止むを得ない結果である。

▲信仰に道德が伴て居ない　口に彌陀の名號を唱へ、心に彌陀を念ずるの信仰はあつても、道德と兩立して居ない、彼等が時として世上の一大問題となつて痛棒を蒙むる所以のものは、金錢と情慾問題である、遠忌、開張、御會式、報恩講など、美なる名稱のもとに莫大の金を集めて然かも其出所明白を缺き甚しきは寺院の○○を誤魔化して妾宅を構へ、夜陰ひそかに其處に通ふて放樂を恣にするが如きは、全く金と色との餓鬼である、京都にある某本山の役僧共が刑事問題のために獄に投ぜられたのは、事實掩ふべからざる證據ではないか、本願寺あつて六條新地の遊廓が榮え祇園膳々うらの上客は、智恩院であるとは京童の私語ところ强ち無根の言ではあるまい。

▲説教に權威が無い　信仰と道德の兩立しないやうな宗教家の説教に耳を貸す人はない、たまたまの説教も人心の機微にふれて衷心から罪惡を悔改めしむるやうな權威ある説教は出來ないのである、多くは因緣因果の小説話で爺さん媼さんへの氣やすめ的説教である、彼等の説教會に有教育の青年男女が集らないのは怪むに足らぬことである

▲教化の原動力が無い　基督教會の眞似をして、日曜講壇を始めたり聖書に倣ふて淨土宗聖典、眞宗聖典を拵へたり、日曜學校を設けたり、幼稚園を開いたり、トラクトを配布したり、〇〇宗傳道隊なんて高張提燈を押立てゝ路傍説教したり、萬事基督教會の例に倣ふて居る、自動力がなくて受動的である、爲ないよりは優かも知れないが精神の入て居らぬ眞似事は、寧ろ滑稽であり、自家の無能を標榜するものである。

以上釋迦の預言に徵し、また佛者の實際生活に徵して見れば、他力教も

自力教も五十歩五十歩である、寧ろ眞宗僧徒の腐敗墮落は、遺憾ながら天下公衆の認むるところ、其腐敗墮落は佛教滅亡の現象である、尤も各宗の内には高德の導師なきにあらねど、夫は曉星と一班極めて寥々たるもの、大多數は預言中の人々である、法住經には種々僧侶の非行を擧て曰く(是の因緣に由るが故に、諸天龍神等悲傷して捨てゝ守護せず、國王大臣も三寶の所に於て信を生せず、誹謗毀輕して正法を滅せし〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇む)と説れてあるのは、全く今日の佛教と佛者の有樣を見ぬきなされた預言である、釋迦の預言に鑑み僧侶の實狀に徵して、佛教の運命已に此の如しとすれば我等は最も健全なる宗教を何れに求むべきか、拙者は自分の確實なる實驗上、基督教を措て他には無からうと思ふ、果して然らば教祖基督は自ら説かせられたる福音の眞理に就て、何と預言なされたであらうか、釋迦の如く滅亡を預言なされたであらうか如何、こは次に

起るべき問題である。

第二章　基督の預言

(一)

基督は釋迦の如く、正像末の三載を說いて、末法に至て正法滅盡すると いふやうなことは說かれて無い、寧ろ世の終末が來るとも、我言は永遠不滅であると申された、(馬可傳十三章十四節ー三十二節參照)エルサレムの滅亡と世の終末に就て預言なされた時、その三十一節に。

天地は癈んされど、我言は癈せじ

と仰せられた、言簡短なれども實に力のある聖言である、假令エルサレム城は滅亡し、尙ほ天地間に大變動が起るとしても、我の敎へた言は決

して滅亡しないと預言なされたのである、釋迦は滅亡を預言し、基督は不滅を預言す、これが佛耶兩敎徒の信仰上、精神上に及ぼす影響は、天地の相違を來すものである。

(二)

約翰傳十二章二十節已下を讀んでみると、希臘の人が、基督に謁見えんとして來られたことが書てある、二人の弟子が其事を基督に申上たときに基督は。

誠に實に汝等に告ん、一粒の麥もし地に落ちて死ずば唯一にてあらん、もし死なば多くの實を結ぶべし　(約翰傳十二章二十四節)

と申された、一粒の麥が土地に播れて死んでこそ後に芽を出し、夫より穗を出して一粒萬倍の實を結ぶが如く、我の死後に於て多くの信者が起るとの預言である、一粒の麥とは基督御自身のことで、死なばとは十

字架上の死で、多くの實とは世界に幾百萬の信徒が出來るといふことを預言なされたのである、單に滅せず癈せじと申されたばかりでない、更に積極的に死後に膨脹するといふのであるから、實に廣大なる抱負といはねばならぬ、これを釋迦の(吾涅槃後魔作沙門壞亂吾道云々)の預言に比較すれば、これまた雲泥の相違である。

(三)

更らに約翰傳十二章の三十二節に。

我もし地より擧られなば、
萬民を引きて我に就せん

と基督が仰せられたのは實に偉大なる希望といはねばならぬ、地より擧られなばとは十字架に擧られて殺され死んで甦つて昇天の後には世界萬民を我に歸服せしむるとの預言である、使徒行傳二章の一節以

下を讀んでみると、基督が昇天なされて十日目は、五旬節といふ猶太人の祭日であつた、その日、聖靈、天より弟子たちの心の裏に降り給ふたことに因つて、彼等の信仰も精神も全く一變した、曩に臆病であつた弟子等は頗ぶる大膽なる態度に於て、正々堂々と基督に關する大說教をいたした結果は、三千人の人々が罪を悔改て基督信者となつた、この三千人の團隊が教會を組織した、これが基督教會の濫腸である、基督の時代には僅に數百の信者であつたものが、昇天後、十日を過ぎて數千人の信者が、一時に起つたといふのは非常な出來事である、基督が(我もし地より擧られなば萬民を引きて我に就せん)と仰せられたる預言が成就せられたわけである、教祖が死んで滅亡する宗教でなく、教祖が殺されて、甦つて、昇天の後に、一大發展したのが基督教である。

(四)

尙ほ基督教の傳播力の著大なることに就て、基督は斯う云ふ譬喩を以て弟子たちを奬勵なされた。

天國は芥種の如し、人これを畑に播ば、
萬の種よりは小けれども、長ちては他の
草より大にして、天空の鳥きたり、
其枝に宿るほどの樹となるなり（馬太傳十三章三十一、二節）

猶太產の芥種は極て小いが畑にまかれて大きく成長すれば、空の鳥きたりて宿るが如く、基督の徒も今は數に於て小いが、後には大多數となつて王侯貴族も來り加はるとの預言である、然るに（國王大臣も三賓の所に於て信を生ぜず）との、釋迦の預言に比較して其相異果して如何、尙ほ。

また譬を彼等に語りけるは

天國は麪酵の如し、婦これを取り
三斗の粉の中に藏せば
悉く脹發すなり（馬太傳十三章三十三節）

麪酵は小さいが、麪そのものを膨脹させるが如く、今の基督の小き群は後に大なる團隊となり得ると仰せられた、いづれも世界的に大發展をなすとの預言である、今や其預言が成就しつゝある。

（五）

基督一たび死より復活せられて四十日の間、弟子たちのうちに現はれ、親しく甦りの事實を彼等に確信せしめ、尙ほ甦りの御身を以て種々教育なし給ひたる後、いよ〳〵弟子等に別れて昇天なされんとする時、

されども聖靈汝等に臨むに因て、後ち、
汝等能力をうけ、エルサレム、

ユダヤ全國、サマリヤ及び地の極にまで、
我證人となるべし、(使徒行傳一章八節)

と申された、果して五旬節の日に聖靈の降臨となり、弟子等は大なる能力をうけて、基督の證をなしたる結果は、エルサレムに基督教會を創設したばかりでなく、一たび迫害の起るに及んで、サマリアの地に散されたる基督信者は、其處にも熱心に福音を傳へしかば多くの信者が興り、更にアンテオケにも傳はりて(使徒行傳十一章十九節―三十節參照)多くの信者が起り、遂にアンテオケ教會はバルナバとパウロの二人を外國傳道のために派遣させることになつた、彼等は(使徒行傳十三章―十四章參照)先づクプロ島に渡つて傳道し、更に小亞細亞の傳道となり、更に一轉してマケドニヤ、ギリシヤの傳道と

なり、遂には當時世界の大都會なる羅馬の帝都にまで、基督の福音を宣傳して、天下いたる處に信者を興し教會を起した僅に猶太のエルサレムに起りし芥種の如き小なる基督教が、羅馬の帝都にまで發展したのである、釋迦は滅後、正像末の三時を經て佛教の滅亡を預言せられたが、基督教は夫れと正反對に基督昇天の後は(聖靈汝等に臨むによりて、汝等能力をうけ、エルサレム、ユダヤ全國、サマリア及び地の極にまで、我が證人と爲べし)と仰せられたる其預言の通り、實際に成就せられたのである。

(六)

以上、基督の預言が實際に成就せられたばかりでなく、馬太傳二十八章十九節二十節に。

汝等ゆきて萬國の民にバプテスマを施し、

之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし、
且つ汝等に命ぜし言を守れと、
彼等に教へよ、
夫われは世の末まで、
常に汝等と偕に在なりアメン

と仰せられたる、基督最後の命令を承まはるまでは、弟子等は單にイスラエルの迷へる民にのみゆきて傳道して居つたが、この大命令に接すると共に、五旬節の日に聖靈をうくるや否や、內國傳道の發展と共に、パウロ、バルナバに依りて外國傳道の端緒は開かれ、遂に羅馬の帝都にまで侵入した、すると爰に猛惡極まる大迫害が起つた、會堂は燒失せられ、聖書は沒收せられ、信者は獄に投ぜられ、目は抉られ、耳鼻は切られ、舌は拔かれ、手足の筋肉は斷たれ、鐵火の椅子に座せられ、鉛の熱湯を浴せら

れ、火刑に處せられ、猛獸に喰はせられるなど、ありとあらゆる峻烈なる慘害を蒙つた、此迫害は凡そ紀元百年から三百十年頃まで續いたのである、然るに信者は忍耐と信仰と愛を以て克く是等の迫害に堪へ、天晴その信仰を貫徹した、如何に猛惡なる加害者も、信者の大忍耐力に打負けて遂に迫害を廢めた、教會歷史の語るところによれば、紀元三百十三年コンスタンチン帝は詔を下して、信教の自由を與へしのみか、迫害時代に沒收せし財產を償ひ、燒失されたる會堂を建るなど、遂には皇帝自らも基督信者となられた、これより迫害時代漸く過ぎて、基督の福音は駸々乎として羅馬帝國の領土に擴がり昌えて往たのである。

こゝに拙者の常に疑惑を感ずることは、彼の日蓮上人が(餘宗無得度法華一佛成道)の法鼓を鳴らしつゝ念佛無間禪天魔、眞言亡國、律國賊と盛んに他宗を攻擊し、然して(一天四海皆歸妙法)を主張せられたのである

が、日蓮の死を弘安五年十月とすれば、其時から今日まで殆んど六百五十年となる、然るに其宣言の如く果して一天四海は皆な妙法に歸して居るかといふに、實際に於て決して左樣でない、八宗九宗あるのみか、仲の惡るい眞宗などがあつて、日本の一天四海でさへも、皆どころか、半分も妙法蓮華經に歸して居ない、況んや歐米の一天四海に於ておやである

然るに基督の福音は基督の昇天後、一瀉千里の勢を以て、ユダヤ全國、サマリア、アンテオケ、スリヤ、小亞細亞、埃及、北アフリカ等に蔓延し、更に南歐羅巴を風靡し、且つ迫害に迫害を加へし羅馬をも征服して、紀元五百九十七年には法皇グレゴリーの命により、アウグスチンが、ブリテン(今の英國)へ傳道に遣はされたと云ふに至ては、向ふ所ろ天下に敵無しの勢力を以て、當時の世界を教化したのである、然るに日蓮宗は日蓮の死

後六百數十年を經ても、未だ日本の一天四海を妙法に皆歸せしむるとが出來ないのは、如何なる理由であらうか。

說あり曰く、日蓮の(一天四海皆歸妙法)は、今日已後の世界を教化するの意味であるといふ、併し拙者の問はんとする處は、今日已後の問題にあらずして、今日迄の教化力を疑ふのである、然らば基督の教は主の昇天後五百九十七年には英國まで侵入して往つたといふのは、全體どこに其原動力があるのであらうか、これは攻究すべき價値ある問題といはねばならぬ、反對者は云ふであらう、基督者には資力もあり、交通の便宜もありしが、日蓮宗は然らずと、これ何の謂ひや、當時の基督者に資力ありしにあらず、交通の便はあつたにしても、夫が理由ではない、もッと、もッと根本的のものがあつたからである、根本的のものとは何か、聖靈である、即ち活る神の御働である、(法獨り弘まらず人能く之を擴む)と云ふ

が、單に人の弘めた宗教ではない、聖靈の神が人を潔め人を用ゐて宣傳なし玉ふたのが基督教である、是は使徒行傳を研究すれば何人も疑ふとの出來ない、歴史上の一大事實である、使徒行傳と稱するよりも(聖靈傳)とせよと學者の云ひしは、實に當然のことと思はれる、所謂(聖靈汝等に臨むによりて汝等能力をうけ)との主の預言の如く、果して弟子等は、天よりの一大靈力に充されて、基督は世のため人のために犧牲の生涯をおくらせ玉ひしのみならず、終には十字架上に犧牲の死を遂げ玉ふたる、其深き恩愛に感激して、奮然起つて決死の靈戰を致したのである。

斯して傳へられたる基督教は、羅馬から北歐羅巴へ、北歐から米國に宣傳せられ、米國より今尚ほ世界の津々浦々にまで、傳道せられて居るのである、併し以上の傳道歴史は古昔の事であり、且つ外國に關するとであるから、讀者諸君は緣遠く感ぜらるゝならんが、回顧すれば日本に新

教の傳へられしは、今より六十年の昔である、其開教の當初より今日に至る迄の活歴史は、全く奇しき聖靈の御働であるといはねばならぬ、就中、拙者の從事せし福音丸の起源と活動ぶりを知り玉はゞ(我もし地より擧られなば萬民を引きて我に就せん)と仰せられたる主の預言が、此處にも實現せるとに驚かるゝであらう。

第三章　福音丸

(一)

今から二十有餘年のむかし、英國の一紳士が夫人と共に來朝せられて神戸市に滯在中、日曜日に當つて教會に出席せられたる時、同市のタムソン宣教師の歡迎するところとなり、午後同師の邸に招かれし際、談たまゝ日本に於ける傳道上のことに及ぶ。

紳士(日本には未だ基督教の傳はつて居らぬ所がありませうか。

教師(この兵庫縣から山口縣までの瀨戸内海に住んで居る百數十萬の人々には傳へられて居りませんの。

紳士(では、傳道なされては如何でせうか。

教師(何分船でなければ傳道か出來ないのと、莫大の費用を要するとですから……。

紳士(幸ひ私は滊船會社の社長を致し居るもの、必要とあれば船でも費用でも、喜んで寄附いたすから是非始めて戴きたい。

教師(さらば一應傳道會社へ交渉して、然るのち、御願ひ申上るから、何分とも御盡力を賴む……。

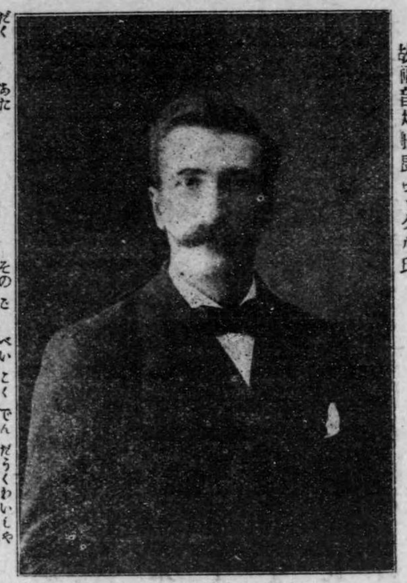
との約束のもとに紳士は歸國し、宣教師はボストンの傳道會社へ右の旨趣を報告して、瀨戸内海傳道の意見をもとめた、傳道會社は協議會を

開いた結果、當時日本の全權公使であつた星亨氏に、瀨戸内海の傳道に就て意見を叩いた、星公使の云はるゝには、夫は日本文化のため願ふてもない多幸の事であるから、是非始めて戴きたい、星一個人としても、公使としても出來得る限りの應援を致すから、よろしく賴むとの挨拶であつた、於是、傳道會社は協議一決、日本瀨戸内海の傳道に着手することなつた、これ偏に(聖靈汝等に臨むによりて汝等能力をうけ、エルサレム、ユダヤ全國、サマリア、及び地の極にまで我證人となるべし)との預言が、東洋の一孤島なる其瀨戸内海の極にまで、成就せられんとする、不思議なる聖靈の御働きと云はねばならぬ。

(二)

船の寄附主は出來た、星公使の賛同は得たが、未だ船長となるべき其人を得ない、船長はあつても、宣教師としての資格を備へた人であらねば

ならぬ、宣教師はあつても、船長としての技倆を有する人であらねばならぬ、傳道會社は此兩面の資格を有する人を物色中であつた、偶々エル、ダブルユー、ビッケル氏のとに及ぶ、同氏は船長として拔群の長技を有するは勿論、宣教師としてまた適任であるとのことから、當時ロンドンの基督教書籍會社の支配人を務めて居られし同氏に交渉せられた處が、同氏は其位置を捨てゝ基督のため、瀨戸内海百數十萬人のために、全身全靈を献げんと快諾を與へられた、其後米國「傳道」會社に來られて、諸般の準備を致され、來朝せられたのは、明治三十一年九月ころであつた、直ちに瀨戸内海を視



故福音丸船長ビッケル氏

察し終つて横濱に來り、自ら造船の設計に從事せられ、西洋の船大工を指揮して、長さ十五間、二本檣の西洋型帆船が、曩に約束せられたる英國の基督者紳士の寄附金壹萬五千圓によつて出來たわけである。

(三)

福音丸

他に類例のない美麗なる、唯福音宣傳のための新造船が出來上つた、名を福音丸と命名して、感謝會、進水式が終つて直ぐ、ビッケル船長を始めとして傳道師、水夫長、水夫等、料理人、給仕等約十名神の攝理の聖手に導れて横濱港を出帆し、遠洲灘にて大暴風に逢ひ、必死の苦辛を經て漸く神戸に寄港し、夫よ

り順次瀬戸内海の諸島にイエス、キリストの福音を傳へ初めしは、まさに明治三十二年の十月であつた。

乗込員一同の給料、傳道に關する經費、本船に關する一切の費用等を合算すれば、其當時でも一ヶ年七千圓を要したのである、其莫大な費用は誰が寄附するかといふと驚くべし、米國にある幾千萬の日曜學校生徒の献金に依て經營せられて居るのである、米國人といへば皆金滿家のやうに思はれて居るが決して左様でない、貧しい人も多くある、その貧しい家の小供までが、日本傳道のためにと喜んで献ぐる涙の金である、拙者が傳道師として福音丸に働いて居つた時、米國の日曜學校生徒の一人から、幸便に托して船長の許に贈物が到着した、夫は優しい手紙と十錢のお金であつた、その手紙に。

「ビッケル船長さん、貴氏は日本の瀬戸内海の人々に基督の福音を傳

へんため御働き下さるとのことを聞て、衷心から感謝いたして居ります、この十錢のお金は親戚の方から小遣にと戴いたのでありますが、今幸便に托して贈りますから、傳道の爲に御遣ひ下さるやうに御願ひ申ます、何卒日本のため、船長さんのため、神の祝福ゆたかならん事を祈ります…」

と云ふやうな手紙の意味を承はつた時に、乗込員一同熱涙を以て神に感謝した、日本で云ふなら紅い紐や、赤い下駄を欲しがる十歳前後の少女が、不見不識の日本人のため、瀬戸内のために、數千里外の米國から赤心にかけて送てくれるといふことは、何たる殊勝な心がけであるか、金は僅に十錢だが、其赤誠は萬金よりも貴きものゝと感じたのである、斯様な熱き涙の金、然かも小供等の献げものに依て、福音丸の事業は經營されて居るのである。

(四)

回顧すれば明治三十五年の一月から四月まで、神學校で修養いたした拙者、五月から九月までの夏季休校中、瀬戸内海傳道のため、福音丸へ遣はさるゝことゝなつた、基督者となつて僅に九ヶ月の無經驗もの、如何して如何して、傳道など出來やうかと辭退したされど故神學校長デーリング博士の勸め、ビッケル船長の招き默し難く、祈りに禱たる結果、愈〻神の使命と決心して御請いたし、成敗如何は神の聖手に托ね奉りて、大膽に備後の糸崎灣から福音丸に乘船したのは、同年の五月五日であつた、同情の深いビッケル船長と夫人に迎へられた、船内狹しと雖も親の家に歸たやうな長閑な氣分がした、毎朝九時一の鈴が甲板で鳴ると、質樸な水夫等は莞爾として各手に聖書を携へて船室へと集つて來る、船長を首として一同讃美歌をうたひ、拙者聖書朗讀の後ち簡短に其聖句を

福音丸の船室

說明して、祈禱をするとが日々の例であつた、斯して數日を祈禱と戰鬪準備のために過したる後、いよ〳〵糸崎灣を出帆して備後灘の佐木島に碇泊した、初陣の拙者、船長と共に上陸して、某家に於て夜の集會を開いて、一時間以上說教いたしたところが、來會するもの場外に溢れた、こんなに熱心に靜聽したのは珍しい、全く聖靈の御働きであると、ビッケル船長は非常に喜ばれた、三日の後、生口島に轉戰の結果、横濱より藤沼牧師を招聘して、此島に講義所創立の件を船長より依囑せられた、同師は鋭意熱心この

任にあたられたが、之が神の祝福と船長始め諸氏の奮闘に因て、今日の福音丸教會と成たのである。

其とき更に備後灘から三島灘の伯方島高根島、岩城島、大三島、大崎上島、大崎下島、大下島、岡村島の島々に福音を傳へ、一轉して周防灘の屋代島伊豫灘の怒和島、中島等いたる處に傳道して、再び生口島に歸泊したのは、同年の八月下旬であつた。船長の厚意によりて、拙者の爲に送別會は開かれ、藤沼牧師と船員一同より深厚なる慰勞の辭をうけて、目出度横濱神學校に凱旋したのは、九月上旬開校式の前日であつた、過去五ヶ月間の聖戰に依て獲たる經驗の二三を擧ぐれば。

(五)

ほのぼのと東天の白む曉の頃、ある島の灣へと投錨した、その島の人々は二本檣の奇麗な西洋船が碇泊して居るので、喫驚して噂とり〳〵の

大評判、時恰かも明治三十五年の六月で、今にも日露戰爭が始まらんとする際であつたから、ソーラ大變だ露西亞の探偵船が來たと誤解して、駐在所へ訴へるやら、役場に知らせるやらの大騒ぎ、そんな事とは知らぬ拙者は、甲板にありて島山の景色を眺めて居ると、巡査と羽織袴の人が傳馬船を急がせて福音丸へと漕いで來る、軈て本船へと乘込んで、嚴重なる態度で云ふには。

巡査(この船は全體どこから來たか。

拙者(生口島の方から今朝こゝへ着しました。

羽織袴(何のための船か。

拙者(基督教を傳へる船です。

巡査(所有主は誰か。

拙者(米國傳道會社です。

羽織袴(米國？何か證據があるか。

拙者(帆柱に掲げられてある米國の國旗が何よりの證據である。

羽織袴(何の必要あつて傳道するか。

拙者(汝等ゆきて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし、且つわが汝等に命ぜし言を守れと彼等に教へよ)との、救主イエス、キリストの命令に從て傳道するのである。

巡査(日本政府の碇泊免狀を持て居るか。

拙者(持て居ります。

巡査、羽織袴(見せてもらひたい。

拙者(遞信大臣よりの碇泊免狀と、寄港地名表とを船長より受取て兩人に示した。

二人は蚤取眼で見て居つたが、漸く露西亞の探偵船でないとが判つた

らしくあつて訊ねらるゝには、この船全般の費用といふものは、何處から來るのであるか、米國政府の支出であるか何うか、拙者答へていふには、米國政府は金を出して世界に基督教を宣布するやうな事はしないと云ふと、福音丸そのものは、英國の基督者紳士の厚意に因て寄附されたるものなると、一般の費用は米國基督教會の日曜學校生徒の献金に依て經營せると、日曜學校といふものは、斯う云ふ性質のものなると等、一時間以上說法に及んだところが、羽織袴の村長も、巡査も、初めの態度は何處へやら一變して、全く感心して仕舞つた、若し今晩この島で說教して下さるなら精々御盡力いたしますからと、同情の言を殘して歸つて往つた、當時は斯の如き誤解と疑惑をうけた福音丸傳道も、今日は到る處に多くの信者と日曜學校が起つて目覺しき發展を遂げて居る。

ある島に碇泊して居ると七八人の者が、小船を漕で來て云ふには私共は向ふの島の住民であるが、耶蘇教を承はりたくて參た者、何卒説教して聞せて貰ひたいとのことであつた、鄭重に彼等を甲板の席へと接待して措いて、拙者は祈禱と準備の爲に自室に往いた處が、一船員の云ふには、彼等は皆本願寺の門徒で、基督教を憎んで居るもの、貴君の説教を聞て擧足を捕へて、非難する積りで來て居るのだから、その積りで説教なさいとの注意であつた、扨はそうであるかと、軈て彼等の前に立て聖書の一節を朗讀した、夫は馬太傳五章十七節にある。

われ律法と預言者を癈る爲に來れりと意ふなかれ

われ來りて之を癈るに非ず成就せん爲なり

……律法とは神がモーセに授け玉ふた神の律法のこと、出埃及記二十章に誌されたる十誡のこと、また二十一章の

人を擊て死しめたる者は必ず殺さるべし(十二)その父あるひは母を擊ものは必ず殺さるべし(十五)人相爭ふとき石または拳をもて其對手を擊しに、死に至すして床に就くことあらんに、若し起きあがりて杖により歩むにいたらば、之を擊たる者は赦さるべし、但し其業を休める賠償をなして、之を全く癒しむべきなり(十八、十九)

と云ふやうな律法の數ケ所を引證して、さて……今日行はれて居る刑法、治罪法は遠くこの神の律法から來たものである、いくら在難い阿彌陀經でも如此律法は無いであらうと説明したところが、一同驚きの耳を聳てゝ聞て居た、更に預言者のこと、果は基督の救に就て説教したところが、擧足どころか、全く感心して云ふには、耶蘇教は此樣尊い教とは知りませんでした、若し私共の島にも傳道して下さるなら、ともゝ盡力致しますとの言に、夫では行きますからとの約束をした、彼等の歸たあとで、好機逸すべからずと、夕方より短艇を急がせて追擊戰と出かけた、さ

て其島に上陸すると帷子の袖無を被たる老爺來りて云ふには、今晩の説教場は拙宅で御座いますからとの案内に從ひ往て見ると、その家は風呂屋で老爺は其亭主である、今に耶蘇教の説教が始まるから聽てゆけと、浴客に勸めて居る、少時とあつてビッケル船長と拙者は煤煙だらけの低い二階へと通され、豆ランプの下に休んで居ると、是でも召食れと老爺の接待ぶり、何かと見れば燒酎に奴豆腐、失禮ですが燒酎は戴きませんと斷わると、夫ではと赤い砂糖水を湯呑に一杯づゝ運ばれた、其厚意に感じて飲んとすると、怒太罵多と、不穩の音、キャーッと叫ぶ階下の聲、何事ならんと驚きの目を睜て居ると、老爺來りて云ふには、耶蘇の宿をするやうな家へは嫁に遣れないと、嘸の實家から苦情が起て來たから、自宅で耶蘇の説教させる事丈は廢てくれと忰が申ますので(馬鹿な事を云へ、天下のお尋ね者にも宿する者があるじやないか、況て萬里

の波濤を越えて宗教を傳へて下さる外國の人に席を貸したが、何が惡いんだ)と、面倒臭いから毆打り飛してやりました、さあ〳〵大抵人も集りましたから、御説教なされて下されませとのと、憐れにもまた氣の毒に感じて、奇怪なる梯子を傳ふて下ると、風呂の流しも、板の間も、庭にも、外にも山なす人、ころは七月の下旬、暑さはあつし湯屋のうち汗水になつて説教した。

抑も福音丸の起源から説き始めて、神の愛から基督の降誕、基督の生涯と事業、十字架上の死と、救の恵、復活、昇天等一時間半にわたる説教中、船長は傍に立て一々説教に適應したる油繪を掲げて彼等に見せた、説教を聞きつゝ之を見た處の彼等本願寺一流の門徒は大に感激した、おらがの寺の説教よりは餘程在り難い、何でもものは聞てみるとだ、聞もしないで惡く云ふのは間違ひだ、何卒今後も時々聽聞させて下さるやう

との正直なる挨拶を耳にしながら、後會を約して短艇を急せ本船に凱旋したのは、夜の十二時過ぎであつた。

(七)

ある島の港に碇泊したのは午後の三時、今宵の説教會のため、旅館の座敷を借らんものと、亭主に談判に及だところ、生憎今晩は村芝居の興行がありますから、明晩になされた方が宜しからんとの言に、それでは明晩にと約束して歸船した、さて翌朝に成てみると御約束は致しました、今晩は村人の集會に席を貸すことになりましたので御斷り申すと破約の回答、再び談判に及んだが不調に終つた、尚ほ彼方此方と捜索すれども基督教説教の爲には一軒の應する家もない、途方に暮れて本船に歸たのは夕飯前、翌朝九時の祈禱會が終るや否や、役場に村長を訪問すると未だ出勤して居りませんと小使らしき人の談、御宅は何處かと

質けば、此村を向ふへ出て田圃を通つて、小山を向ふへ下つて、池を廻つて、籔に添ふて眞直ぐに往つて、右へ曲つて横に入た所と、殊更に六ヶ敷教へられ、漸くビッケル船長と共に訪問すれば、先刻役場へ出かけましたとのこと、もと來し道を後戻りして再び役場で訊けば、道路普請の檢分に行れましたとのこと、ハハア村長は説教場の斡旋を賴れた爲に、耶蘇教の提燈持をしたと村民から憎れては面倒と、逃げを張たものと想像したのは癖目か愚痴か、我等は奔命と空腹に疲れて船に歸たのは午後の二時、碇泊已來三日を經るも、未だ説教會の運に至らず遺憾無涯、只管神の祐助を禱り求めた、翌朝の祈禱會には一同力を合せて、傳道の門戸、此島に開かれんことを熱禱したる後、六七名の船員をつれて上陸し、トラクトを配付しながら戸別訪問をして云ふには(本日午後二時より福音丸を開放して、縱覽に供しますから、繰合御來船下さるやうに)と、鄭

重に案内して歩いた、さて甲板を掃除し敷物を布て、茶菓の用意抔をして、待てども待てども誰も來ない、二時が三時になつても數百軒のうちから猫の子も出て來ない、聞けば全村擧つて本願寺の門徒にて基督教に對して敵視して居る島人てあると云ふ、ビッケル船長曰く決して失望する勿れ、如此にして二十年間、毎年毎年忍耐と愛を以て來るならば、確に神は服從者を與へ給ふ故に、飽くまで信仰を以て奮闘を續けねばならぬと奬勵せられた、船長の二十年云々の忍耐强き一言には一同感服して、祈禱を以て一まづ他島に向つて出帆した。

如此忍耐と信仰を以て奮戰したる二年の後ち、傳道の門戸、此島に開かれて教育のある人が基督信者と成た、實に巧妙なる神の御攝理と讃美せざるを得なかつた、其後ある島に碇泊して居ると、船長へ宛てゝ無名の葉書が舞込んて來た、其文に。

（……よくも此島の住民を耶蘇の信者にし居つた、今後來てみろ、殺してやるから左樣心得ろ……）

と云ふ意味の嚇し文句が並べてあつた、船長その葉書を拙者に見せて（今井さん如何です、一所に殺されに往かうではありませんか）と、微笑をたゝへて話されたこともあつた、然るに今日では續々信者が起り、日曜學校も經營せられて居る、如何に頑固なる安藝門徒と雖も、基督の十字架の敎には到底敵することは出來ない。

（八）

此島を出帆して瀨戸内を西へ西へと、山口縣の島嶼にまで傳道して、再び廣島縣のある島に歸着したのは、明治三十五年の八月下旬であつた、藤沼牧師たゞちに福音丸に來りて云はるゝには、先日この島の和尙連中が合同して、三日間耶蘇退治の演説をすると云ふので、傍聽に往た處

が、實に亂暴極まる演説であつたから、其席上に於て彼等の誤謬に對する辯駁を致し、更に各寺に和尚等を訪問して、基督教の眞理と、福音丸の起源に就て説明すると共に、佛者から基督教に改宗せられた、今井氏の實驗的信仰を聞くことが、君等の爲に有益だらうと申した處が、夫では是非拜聽しやうと云ふので、和尚等は君の來るのを待て居る處であるとのこと、夫では寧のこと劇場を借りて大演説會をしては、何うかと云ふことに成て交渉したが、虎疫流行のため公開演説は出來ないといふので、止むを得ず福音丸に和尚連を招くことにした、翌日の午後、牧師は禪僧一人、淨土僧一人、眞宗僧二人を連れて來た、ピッケル船長は、一々鄭寧に挨拶しながら彼等を甲板の席へと請せられた、拙者も牧師に依て彼等に紹介せられた、おの〳〵席定まるや、一人の和尚、ポン筒から煙管を取り出して煙草を燻しながら、拙者に言ふには、貴君は佛教から基督

教に改宗せられたそうだが、全體基督教には、どんな高尚な教義があるのですか、夫を承はりたいと云ふ、拙者答へて、……教義ではない、生命に觸れて、改心改宗したのであると云ふた、孰れも瀨戸内での名僧だが、判つたのか、分らないのか怪訝な顏をして居るので、更に斯う言つた、佛教の教義と基督教の教義とを比較研究した結果、改心改宗したのではない、神の靈的生命に觸れて、釋然として罪を認め、翻然として神に悔改めて、基督に服從したのである、基督が猶太人の宰なるニコデモに(人は水と靈によりて生ざれば、神の國に入ること能はざるなり)(約翰傳三章五節)と仰せられた如に、人は神の靈的生命によらざれば、新しく生れることは出來ない、拙者は其靈に觸れて、精神的にも道德的にも宗教的にも新しく生れたが故に改宗した譯である、さりとて基督教に教義がないと申すのではない、色々高尚な教義はある、併し教義よりも此靈的生命こ

そ教義以上の大切なるものであると繰返した、處が淨土宗の坊さん肩を怒らして言ふには、人間は現世に於て新生なんて出來るものでない、そりや嘘だ、未來彌陀の淨土に往生せざれば駄目であると、反對の言未だ終らぬうちに、對ひ合て居る禪宗の坊さん、淨土僧の言尻を捉へて言ふには、君、馬鹿なことを云ひ玉ふな、そんな迂遠な佛教を說くから、耶蘇教の人々に嗤はれるのである、未來極樂世界に往かなければ、成佛出來ないやうな佛教ならば、この現實世界に何の必要もない、そんな淨土教は駄目だ、僕等の禪宗では是身是佛である、現世に生て居るうちに成佛できると云ふのが、禪家の宗意安心であると喝破した、之を聽た淨土坊さん、怒るまいことか怒るまいことか眞赤に成て怒つた、果して君は成佛して居るか、どこに成佛して居るかと敦圍た、禪宗坊さんも仲々默つて居ない、互に口角泡沫を飛して、摑み合はんばかりに喧嘩した。

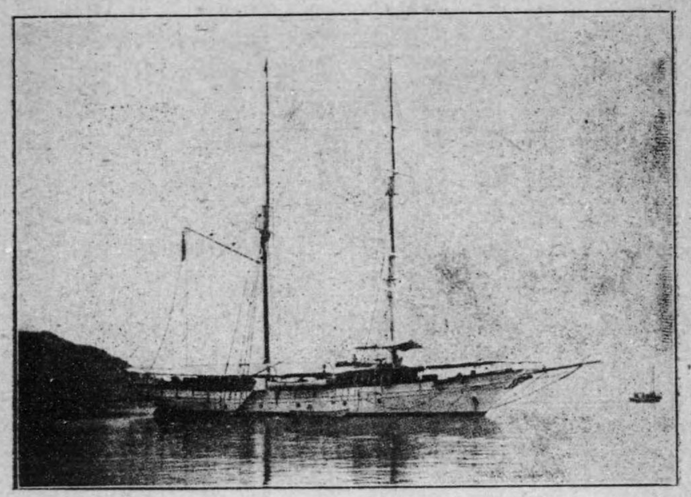
ビッケル船長は見るに見かねて、マアマア〳〵お靜になさつて下さいと仲裁を試みたが、淨土僧の憤り伸々おさまらない、艴然として歸て了つた、同じ他力黨の眞宗連も怒つて往つて了つて、總攻擊をする積りで來た彼等聯合軍が、同志撲を演じて見事に失敗した、殘りの禪僧は牧師や拙者や船長が代はる代はる語る、基督教に甚く感じて本日は出まして誠にハヤ有難う御座いました、ちと拙僧の寺へも御遊びに入らつして下さいと、頗ぶる謙遜に成つて禮を述べて歸へられた、夕方上陸してみると、理髮店でも湯屋でも大評判、寺の和尙どもは耶蘇退治のため福音丸に押かけて、却て散々に負されて歸たげナ、よせば可に自己の頭の蠅も追へない癖に、耶蘇を退治するなんて、出來てたまるもんか、よい嗤ひもんでごわすとの噂とり〳〵、耶蘇教徒には負され、村では嗤笑れ、憐にもまた氣の毒な次第であつた、其後の禪僧は己が寺の說教會に基督信者

は莫大の淨財を寄捨して、福音丸を造つて瀬戸内海のために傳道して居る。然るに我寺の檀徒は本堂の屋根が破損しても、瓦一枚心よく寄附して呉ない、よろしく基督信者の熱心に倣ふべしと、昨日まで退治せし基督教を、今日は例に引て説教するといふ大變化、其後和尚はたま〳〵の上京に、海老名牧師の説教を聞んと、本郷教會にいたりしに、數百の聽衆は大學、高等其他前途多望なる男女青年の學生場外に溢れて熱心に傾聽せるを視て、其集會の神聖なる、また旺盛なる、到底わが佛教徒の及ぶ處にあらずと驚き、日曜毎に參聽して甚大なる感動をうけて島に歸り來り、藤沼牧師を訪ふて云ふには、私も斷然基督教に改宗いたしたい、兎手毛今後の日本教化は、佛教では駄目である、夫は然か〳〵箇樣〳〵の譯と、本郷教會に詣でゝ見聞せし事實を、正直に告白すると同時に、已前ヤツ退治の演説せし輕舉妄動に對して、謝罪せられたといふことで

ある。

拙者が十六年の昔、初めて福音丸の傳道に從事せし頃は、瀬戸内海、百數十萬人の内に、一基督者も無りしに、今日では福音丸の向ふところ尊敬と同情を以て歡迎せられ、百數十萬の人々擧つて求道者の觀がある、加之、目下三百人の信徒と三千人以上の日曜學校生徒を有し、孰れも堅實なる發達を遂げて居る、そこで創業當時の福音丸では何かと不便なれば、一昨年よりは五萬餘圓の費額を以て、更に以前に優る大福音丸を新造し、壹岐、對馬、平戸、五島群島まで傳道區域を擴張して居る、尚ほ近き將來には冲繩群島まで進軍する準備中である。

顧れば過去十九年間、瀬戸内海の爲に全く我を忘れて、奮戰力闘せしピッケル船長は、過勞のために健康を害し、當春、神戸に在りて靜養中、遂に療養相叶はず五十二歳を一期として永眠せられた、船長としての技術



現今の福音丸

に於て、信仰に於て、人格に於て、愛に於て、熱誠に於て、學問に於て、實に珍しい大人物であつた、翌日神戸バプテスト教會に於て莊嚴なる葬式を擧げ、六月十日午後一時、廣島縣生口島瀨戸田町、福音丸教會に於て本葬式を擧ぐ、東は小豆島、西は平戸より來り會するもの一千人、孰れも船長生前の功勞に對し滿腔の感謝を表すると共に、船長を慕ふて泣かぬ者は一人も無つ

た、瀨戸内海の父と仰がれしビッケル船長を喪ひしことは惜みても惜みても餘りあることである、さは去りながら昔を想へば、一基督者のなき瀨戸内海に來りし時、猜疑と侮蔑を以て迎へられし船長が、死に及んで涙ながらに會葬するもの一千人、この他きたり得ざるもの尙ほ幾百千なるを知らず、眞に基督に因て修養されたる人格の感化は、偉大なるものと云はねばならぬ。

目下ブリックス教師、船長代理となり、伊藤、柴田の兩牧師、其他數名の男女傳道師、信徒一同、故ビッケル船長の精神をうけつぎ、ますゝ神の事業の爲に大奮鬪を續けて居る、如何に本願寺門徒の反對はあつても、各宗僧徒の耶蘇退治はあつても、(汝荆ある鞭を蹴は難しと、基督の仰せられたるが如く、却て反對に感化せられて、滔々福音の眞理が宣傳されてゆくのである、所謂基督の。

一粒の麥もし地に落ちて死ずば唯一にてあらん、もし死なば多くの實を結ぶべし

と云ひ、或は。

我地より擧れなば萬民を引て我に就せん

と云ひ、或は。

聖靈汝等に臨むによりて能力をうけ……

……地の極にまで我證人となるべし

との預言が、我國瀬戸内海の極にまで實現せられて居るのである。

若し日本佛敎の運命如何んと問ふ人あらば、拙者は滅亡と答へ度ので

ある、そは拙者の獨斷にあらずして、上記せる釋迦の預言であると共に、

其の預言が實際に應現せるが故である、併し將來哲學として學說として

識者の間に研究せらるゝであらうが、宗敎としての權威は支那、朝鮮

の佛敎の如く、自然消滅するものと斷言するに憚からないのである、如

斯運命を有する佛敎に對て、永遠の希望を全ふせんこと、到底拙者の實

驗上不可能のことであつた。

然らば我國の基督敎は如何と云はゞ、新敎六十年來の傳道史に鑑み、福

音丸が瀬戸内海に於ける二十年間の實驗に徵し、或は過去三年間の全

國協同傳道の好成績を見るにつけても、麪酵の膨脹せしむるが如く、芥

種の成長するが如く、愈々增々發展して我國を敎化せんこと、基督の預

言であると共に、事實に於て之を確認せざるを得ないのである。

讀者諸君、基督の宗敎は罪のうちより個人を救ひ、家庭を救ひ、社會を救

ひ國家を救ひ、遂には全世界を救ふべき救の宗敎である、併し十字架の

敎は沈淪者には愚なるものである、されど我等救はるゝ者には神の能

である、この能に依て拙者は救はれて改宗した、若し此救の惠をうけざ

りしならば、已に身も靈も亡びた者である。然るに十七年のむかし新生の惠を實驗して已來、年を積み經驗を累ねるに從て、愈々個人の靈魂を救ひ我國家を救ふべき宗敎は、基督の福音の外にあること無と確信するものである。冀くば信者諸君は飽まで勝利の信仰を續け、志道者諸君は熱心に神を信じ基督を信じて、救の惠を實驗し、更に聖書を深く〳〵研究せられんことを、切にお勸めする次第である。

予が實驗の宗敎 終

大正六年十二月二十八日印刷
大正六年十二月三十一日發行

定價金拾五錢

著者　今井革　東京市京橋區明石町八番地　基督敎興文協會代表者　エス・エチ・ウエンライト

發行者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷者　東京市京橋區銀座四丁目一番地　福音印刷株式會社

印刷所　東京市京橋區明石町八番地　日本基督敎興文協會

發賣所　警醒社・敎文館・福音書店・基督敎書類會社・岩波書店・丸善書店

不許複製

325
269

終